

『あの日、見た稽古』

香川県

自習館

中学1年生

藤井由帆

僕が入門している道場の稽古を、初めて見た日の事は決して忘れません。ピンと張り詰めた空気の中、最高の集中力で打ち続けられる左右胴。決して広くない道場で、お互いに当たる事も無く、面も付けずに行われていたその稽古の足さばき、打ちの強さ、何にも勝る気迫、今まで見た事の無い稽古でした。悪い所などどこにも無い様に見えるその稽古にも、館長の厳しい指導が入ります。面を付けての稽古では、僕より大きな先輩が、体当たりで飛ばされます。少しでも気迫が感じられないと、道場で稽古する事は許されません。厳しい稽古に、怯む事なく何度でも、何度でも立ち上がり、苦しい息の中更なる強い気迫で立ち向かうその姿に感動し、僕も先輩の様に強くなるんだと心に決めて入門しました。

稽古はいつも全力でついていけないとついていけませんでした。初級、中級の稽古で元に立ってくれる先輩は、いつも全力で僕も気を抜く時はありませんでした。初級、中級の稽古が終わると、上級の稽古が始まります。素早い足さばき、強く早い打ち、溢れる気迫、どれを取っても素晴らしく、何より諦めない気持ちを感じられました。出来なくても全力でついていく稽古がそこにはありました。自分の稽古が終っても、上級の稽古を夢中で見ていました。時々、

「残っとなだったら、面打ちするか？」

と館長から声をかけてもらえました。とても嬉しかったのを覚えています。家に帰っても毎日竹刀を振りました。剣道が楽しくてたまりませんでした。早く中学生になって、上級の稽古に入りたいといつも思っていました。必ず強くなれると信じていました。

そして僕は中学生になりました。剣道部に入部し放課後は、毎日稽古が出来ます。終わったら稽古のある日はそのまま道場に向かう日々。中学生になったら、剣道も勉強も一生懸命して、自分の夢に一步でも近づこうと思っていました。しかし現実には、夏を過ぎ部活の稽古にも慣れ、全力を尽くさず、加減する事もありました。努力もせず、上がらない成績に嫌気がさしていました。全て自分の弱さのせいなのに何かのせいにしたくてたまりませんでした。

そんなある日、部活を終えて道場へ行きました。いつも通りの稽古をしていたつもりでした。突然館長に面を打たれ怒鳴られました。

「声も出ない。やる気が無いなら道場から出なさい。」

何度稽古に入らせて下さいと頼んでも道場に入ることは許されませんでした。暫くしてから館長が稽古をつけてくれました。震える手で打つ弱い面は返され、何度も打たれました。館長に言われた一言が胸に込み上げます。

「お前だけは違うと思っていた。」

小柄な僕に届かなくても届くと思って打つと決して逃げず、面を打つ事を教え続けて下さり、何度も自分の手を腫らし、幼かった僕に何回でも小手を打たせて下さった館長の面から見えた目はとても悲しそうでした。館長に打たれて痛かったのは、面でも小手でもなく僕の弱い心でした。稽古の後で館長に

「素振り。千本」

と言われました。足、腰、腕と今まで教えて頂いた事を思い出しながら振っていた僕に先輩が声をかけてくれました。僕が叱られたのは自分より小さい子の元立ちをしていた時でした。どんな小さい相手にも全力で稽古をし

ていた先輩。僕は自分が恥ずかしかったです。

僕の通っている道場で頂く面タオルには、大きく一文字“夢”とあります。あの日初めて見た稽古にはまだまだ追いつけそうもありません。僕の夢はあの日の稽古を上回る稽古を続ける事です。そして館長の全力の教えを胸に、美しく正しく強い剣道で勝負し続ける先輩の様に日本一になりたいです。夢は逃げない。逃げるのは自分。あの日の稽古を思い出し、もう一度夢を追いかけます。感謝の気持ちを強さに変えて。もう僕は逃げません。